

草原管理を反映する指標植物の検証

近畿中国四国農業研究センター上席研究員・里山学研究センター研究スタッフ

高橋 佳孝

半自然草原の保全・再生を進めていく上で重要なのは、成果を評価して実施者・支援者に分かりやすく公表していくことである。草原面積や野焼き面積の増減などは比較的容易に評価できるが、生物多様性に関しては専門的な知識がないと評価はむずかしい。管理の担い手である農家や、保全再生に取り組む市民が活用できるような、生物多様性を簡便に評価する指標の開発が求められている。

もともと阿蘇では植生のデータが少なく、現在、環境省九州地方環境事務所を中心に、3年前頃から植生調査によって基礎データを蓄積しつつ、管理の方法や種の多様性を指標する植物種の抽出が行われてきた。本年度、これまでに集めたデータを解析し、「指標種マニュアルの暫定版（Version 1）」を作成した。今回（2013年8月中旬）は、その暫定版マニュアルの実用性を検証するために、牧野組合員や大学生など一般の方にとってこのマニュアルが利用可能か、あるいは正しい評価点数になっているかどうか、また修正すべき点は何かについて、現場での検証作業を実施した。

中央火口丘のF牧野で「放牧地用のマニュアル」を、北外輪山M牧野で「採草地用マニュアル」を使って、3m四方の枠内においてマニュアルに掲げてある植物（夏～秋に開花する植物）を探索した。牧野組合の方は、植物の見分けはほぼ完璧であった。大学生たちも、専門家による少しの手伝いさえあれば、あとは自分たちだけでマニュアルにあるほとんどの植物の見分けができた。専門家は同じ場所の植生調査を行い、見立てが正しいかどうかをチェックするのが役目となる。

参加者は全員、和気あいあいと楽しく野の花を見つけることができたが、まだまだ改善の余地はある。「やはりイネ科の植物は一般の方には見分けがむずかしい」、「厳密に種で分けずにグループ化してはどうか」、「ページをめくらなくても一目で掲載種が見えるのもっと使いやすい」など、様々な意見が出てきた。今回の成果を受け、日本生態学会の自由集会「二次草原の保全再生に生物多様性評価指標をどう活かすか？」（2014年3月14日、企画者：岡野隆宏）において、静岡の茶草場と阿蘇の草原における試みを紹介し、評価指標を活用した半自然草原の保全再生の仕組み作りについて論議した。

欧州では、このような野の花のマニュアルに載っている数種類の草花が見つかれば、農家が助成金をもらえるという粋な政策を実現している国（州）もある。行政にとっては草原再生事業の効果を簡便にしかも現場レベルで評価するため、また、牧野組合員にとっては自分たちの牧野の健康度を理解するため、子供たちや学生には草原での生き物調査のテキストとして、い

ろいろな形で幅広く活用してもらえよう、今後さらに修正や改善をして、バージョンアップをはかる予定である。

